第二十二講《小説その４》日常と非日常の対比

次の文章は、岡本かの子の小説「快走」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文は、四つの場面にわけられる。

第一場面

中の間で道子は弟の準二の正月着物を縫い終って、今度は兄の陸郎の分を縫いかけていた。
「それおやじのかい」
離れから廊下を歩いて来た陸郎は、通りすがりにちらと横目に見て訊いた。
「兄さんのよ。これから兄さんも会社以外はなるべく和服で済ますのよ」
道子は顔も上げないで、忙がしそうに縫い進みながら言った。
「国策(注1)の線に添ってというのだね」
「だから、着物の縫い直しや新調にこの頃は一日中大変よ」
「はははははは、一人で忙がしがってら、だがね、断って置くが、銀ぶら(注2)なぞに出かけるとき、俺は和服なんか着ないよ」
そう言ってさっさと廊下を歩いて行く兄の後姿を、道子は顔を上げてじっと見ていたが、Aほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた。すると急に屈托(注3)して来て、大きな脊伸びをした。肩が凝って、坐り続けた両腿がだるく張った感じだった。
道子は立上って廊下を歩き出した。そのまま玄関で下駄を履くと、冬晴れの午後の戸外へ出てみた。
陽は既に西に遠退いて、西の空を薄桃色に燃え立たせ、眼の前のまばらに立つ住宅は影絵のように黝ずんで見えていた。道子は光りを求めて進むように、住宅街を突っ切って空の開けた多摩川(注4)脇の草原に出た。一面に燃えた雑草の中に立って、思い切り手を振った。
冬の陽はみるみるうちに西に沈んで、桃色の西の端れに、藍色の山脈の峰を浮き上らせた。秩父(注5)の連山だ！　道子はこういう夕景色をゆっくり眺めたのは今春女学校(注6)を卒業してから一度もなかったような気がした。あわただしい、始終追いつめられて、

縮こまった生活ばかりして来たという感じが道子を不満にした。

ほーっと大きな吐息をまたついて、彼女は堤防の方に向って歩き出した。冷たい風が吹き始めた。彼女は勢い足に力を入れて草を踏みにじって進んだ。道子が堤防の上に立ったときは、輝いていた西の空は白く濁って、西の川上から川霧と一緒に夕靄が迫って来た。東の空には満月に近い月が青白い光りを刻々に増して来て、(注7)幅三尺の堤防の上を真白な(注8)坦道のように目立たせた。道子は急に総毛立ったので、身体をぶるぶる震わせながら堤防の上を歩き出した。途中、振り返っていると住宅街の窓々には小さく電灯がともって、人の影も定かではなかった。ましてその向うの表通りはただ一列の明りの線となって、川下の橋に連なっている。

誰も見る人がない……………よし…………思い切り手足を動かしてやろう…………道子は心の中で呟いた。膝を高く折り曲げて足踏みをしながら両腕を前後に大きく振った。それから下駄を脱いで駈け出してみた。女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧き上って来た。道子は着物の裾を端折って堤防の上を駈けた。髪はほどけて肩に振りかかった。ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。もとの下駄を脱いだところへ駈け戻って来ると、さすがに身体全体に汗が流れ息が切れた。胸の中では心臓が激しく衝ち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がぴくぴくとふるえた。——ほんとうに潑剌と活きている感じがする。女学校にいた頃はこれほど感じなかったのに。毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮していると、こんな駈足ぐらいでもこうまで活きている感じが珍らしく感じられるものか。いっそ毎日やったら——

道子は髪を束ねながら急ぎ足で家に帰って来た。彼女はこの計画を家の者に話さなかった。両親はきっと差止めるように思われたし、兄弟は親し過ぎて揶揄うぐらいのものであろうから。いやそれよりも彼女は月明の中に疾駆する興奮した気持ちを自分独りで内密に味わいたかったから。

翌日道子はアンダーシャツに(注9)パンツを穿き、その上に着物を着て隠し、汚れ足袋も新聞紙にくるんで家を出ようとした。

「どこへ行くんです、この忙がしいのに。それに夕飯時じゃありませんか」

母親の声は鋭かった。道子は腰を折られて引返した。夕食を兄弟と一緒に済ました後でも、道子は昨晩の駈足の快感が忘れられなかった。外出する口実はないかと頻りに考えていた。

「ちょっと銭湯に行って来ます」

道子の思いつきは至極当然のことのように家の者に聞き流された。道子は急いで石鹸と手拭と湯銭（注10）を持って表へ出た。彼女は着物の裾を蹴って一散に堤防へ駈けて行った。冷たい風が耳に痛かった。堤防の上で、さっと着物を脱ぐと手拭でうしろ鉢巻をした。凛々しい女流選手の姿だった。足袋を履くのももどかしげに足踏みの稽古から駈足のスタートにかかった。爪先立って身をかがめると、冷たいコンクリートの上に手を触れた。（注11）オン・ユアー・マーク、ゲットセッ、道子は弾条仕掛のように飛び出した。昨日の如く青白い月光に照らし出された堤防の上を、遥かに下を多摩川が銀色に光って淙々（注12）と音を立てて流れている。

次第に脚の疲れを覚えて速力を緩めたとき、道子は月の光りのためか一種悲壮な気分に衝たれた——自分はいま溌剌と生きてはいるが、違った世界に生きているという感じがした。人類とは離れた、淋しいがしかも厳粛な世界に生きているという感じだった。

第二場面

道子は着物を着て小走りに表通りのお湯屋へ来た。湯につかって汗を流すとき、初めてまたもとの人間界に立ち戻った気がした。道子は自分独特の生き方を発見した興奮にBわくわくして肌を強くこすった。

家に帰って茶の間に行くと、母親が不審そうな顔をして

「お湯から何処へまわったの」と訊いた。道子は

「お湯にゆっくり入ってたの。肩の凝り（注13）をほごすために」

傍で新聞を読んでいた兄の陸郎はこれを聞いて「おばあさんのようなことをいう」と言って笑った。道子は黙って中の間へ去った。

第三場面

道子はその翌晩から出来るだけ素早くランニングを済まし、お湯屋に駆けつけて汗もざっと流しただけで帰ることにした。だが母親は娘の長湯を気にしていた。ある晩、道子がお湯に出かけた直後

「陸郎さん、お前、直ぐ道子の後をつけてみて呉れない。それから出来たら待ってて帰るところもね」と母親は頼んだ。陸郎は妹の後をつけるということが親し過ぎるだけに妙に照れくさかった。「こんな寒い晩にかい」彼は別な言葉で言い現しながら、母親のせき立てるのもかまわず、ゆっくりマントを着て帽子をかぶって出て行った。陸郎はなかなか帰って来なかった。母親はじりじりして待っていた。そのうちに道子が帰って来てしまった。

「また例の通り長湯ですね。そんなに叮嚀に洗うなら一日置きだってもいいでしょう」

「でもお湯に行くと足がほてって、よく眠れますもの」

兎も角、眠れることは事実だったので、道子は真剣になって言えた。母親は

「明日は日曜でお父様も家においでですから、昼間私と一緒に行きなさい」

と言った。道子は何て親というものはうるさいものだろうと弱って

「なぜそう私の長湯が気になるの。眠る前に行く方がいいけれど、それじゃ明日は昼間行きましょう」

道子は一日ぐらいは我慢しようと諦めた。それが丁度翌日は雨降りになった。道子は降り続く雨を眺めて――この天気、(注14)天祐っていうもんかしら………少くとも私の悲観を慰めて呉れたんだから………そう思うと何だか可笑しくなって独りくすくす笑った。

お昼過ぎに母親と傘をさして済した顔でお湯に行った。

「そんなに長くお湯につかってるんじゃありませんよ」

母親が呆れて叱ったけれど、道子は自分の長湯を信用させるために顔を真赤にしてまで堪えて、長くお湯につかっていた。

やがて洗し場に出て洗い桶を持って来るときは、お湯に逆上せてふらふらしたが、額を冷水で冷したり、もじもじしているうちに癒った。

「いい加減に出ませんか」

母親は道子のそばへ寄って来て小声で急き立てるので、やっと身体を拭いて着物を着たが、家へ帰るとまた可笑しくなって奥座敷へ行って独りくすくす笑った。

「道子はこの頃変ですよ。毎晩お湯に行きたがって、行ったが最後一時間半もかかるんですからね。あんまり変ですから今日

は私昼間連れて行ってみました」

　母親は茶の間で日記を書き込んでいた道子の父親に相談しかけた。

「そしたら」

父親も不審そうな顔を上げて訊いた。

「随分長くいたつもりでしたが四十分しかかかりませんもの」

「そりゃお湯のほかに何処かへ廻るんじゃないかい」

「ですからゆうべは陸郎に後をつけさせたんですよ。そしたらお湯に入ったというんですがねえ、その陸郎が当てになりませんのよ。様子を見に行ったついでに、友達の家へ寄って十二時近くまで遊んで来るのですから」

「ふーん」

父親はじっと考え込んでしまった。

雨のために響きの悪い玄関のベルがちりと鳴って止むと、受信箱の中に手紙が落された音がした。母親は早速立って行って手紙を持って来たが

「道子宛ての手紙だけですよ。お友達からですがねえ、この頃の道子の様子では手紙まで気になります。これを一つ中を調べて見ましょうか」

「そうだね、上手に開けられたらね」

父親も賛成の顔付きだった。母親は長火鉢(注15)にかかった鉄瓶(注16)の湯気の上に封じ目をかざした。

「すっかり濡れてしまいましたけれど、どうやら開きました」

母親は四つに折った(注17)書簡箋をそっと抜き出して拡げた。

「声を出して読みなさい」

父親は表情を緊張さした。

　勇ましいおたより、学生時代に帰った思いがしました。毎晩パンツ姿も凛々しく月光を浴びて多摩川の堤防の上を疾駆するあなたを考えただけでも胸が躍ります。一度出かけて見たいと思います。それに引きかえこの頃の私はどうでしょう。風邪ば

かり引いて、とてもそんな元気が出ません……」
「へえ、そりゃほんとうかい」
父親はいつもの慎重な態度も忘れて、頓狂な声を出してしまった。
「まあ、あの娘が、何ていう乱暴なことをしてるんでしょう。呼び寄せて叱ってやりましょうか」
母親は手紙を持ったまま少し厳しい目付きで立上りかけた。
「まあ待ちなさい。あれとしてはこの寒い冬の晩に、人の目のないところでランニングをするなんて、よくよく屈托したからなんだろう。俺だって毎日遅くまで会社の年末整理に忙殺されてると、何か突飛なことがしたくなるからね。それより俺は、娘の友達が言ってるように、自分の娘が月光の中で走るところを見たくなったよ………俺の分身がね、そんなところで走ってるのをね」
「まあ、あんたまで変に好奇心を持ってしまって。でも万一のことでもあったらどうします」
「そこだよ、場合によったら弟の準二を連れて行かせたら」
「そりゃ準二が可哀そうですわ」
「兎も角、明日月夜だったら道子の様子を見に行く」
「呆れた方ね、そいじゃ私も一緒に行きますわ」
「お前もか」
二人は真剣な顔をつき合せて言い合っていたが、急に可笑しくなって、はははははと笑い出してしまった。二人は明日の月夜が待たれた。

第四場面

道子には友達からの手紙は手渡されなかったし、両親の相談など知るよしもなかった。ただいつも晩飯前に帰らない父親が今日は早目に帰って来て自分等の食卓に加わったのが気になった。今晩お湯に行きたいなぞといえば母親が一緒に行くと言うかも知れぬ。弱った。今日は午前中に雨が上って、月もやがて出るであろう。この好夜、一晩休んで肉体が待ち兼ねたようにうずい

ているのに。段々遅くなって来ると道子はいらいらして来て遂々(とうとう)母親に言った。

「お湯へやって下さい。頭が痛いんですから」

母親は別に気にも止めない振りで答えた。

「いいとも、ゆっくり行ってらっしゃい」

道子はわれ知らず顔をほころばした。こんなことってあるかしらん——道子は夢のような気がした。夢なら醒(さ)めないうちにと手早く身支度(みじたく)をし終って表へ出た。寒風の中を一散に堤防目がけて走った。——今夜は二日分、往復四回駆けてやる——

道子は堤防の上に駆け上って着物を脱いだ。青白い月の光が彼女の白いアンダー・シャツを銀色に光らせ、腰から下は黒のパンツに切れて宙に浮(うか)んだ空想の胸像の如く見えた。彼女は先(ま)ず腕を自由に振り動かし、足を踏んで体ならしを済ました。それからスタートの準備もせずに、いきなり弾丸のように川上へ向って疾走した。やがて遥かの向うでターンしてまた元のところへ駆け戻って来た。そこで狭い堤防上でまたくるりとターンすると再び川上へ向って駆けて行った。

このとき後から追っかけて来た父親は草原の中に立って遥かに堤防の上を白い塊(かたまり)が飛ぶのを望んだ。

「あれだ、あれだ」

父親は指さしながら後を振り返って、ずっと後れて駆けて来る妻をもどかしがった。妻は、はあはあ言いながら

「あなたったら、まるで青年のように走るんですもの、追いつけやしませんわ」

妻のこの言葉に夫は得意になり

「それにしてもお前の遅いことったら」

妻は息をついで

「これでも一生懸命だもんで、家からここまで一度も休まずに駆けて来たんですからね」

「俺達は案外まだ若いんだね」

「おほほほほほほほ」

「あははははははは」

二人は月光の下を寒風を切って走ったことが近来にない喜びだった。二人は娘のことも忘れて、声を立てて笑い合った。

（注）

1　国策――国家の政策。この小説が発表された昭和一三（一九三八）年前後の日本では、国家総動員法が制定されるなど国民生活に様々な統制が加えられた。

2　銀ぶら――東京の繁華街銀座通りをぶらぶら散歩すること。

3　屈托――「屈託」に同じ。

4　多摩川――山梨県に発し、南東へ流れて東京湾に注ぐ川。

5　秩父の連山――東京、埼玉、群馬、山梨、長野の都県境にまたがる山地。秩父は埼玉県西部の地名。

6　女学校――旧制の高等女学校の略。

7　幅三尺――一尺は約三〇・三センチメートル。

8　坦道――平坦な道。

9　パンツ――運動用のズボン。

10　湯銭――入浴代のお金。

11　オン・ユアー・マーク、ゲットセッ――競走のスタートの際のかけ声。

12　淙々――よどみなく水の流れるさま。

13　ほごす――「ほぐす」に同じ。

14　天祐――天のたすけ。

15　長火鉢――長方形の箱火鉢。火鉢は、手先を暖めたり湯を沸かしたりするために炭火を入れる調度。

16　鉄瓶――湯を沸かす鉄製の容器。

17　書簡箋――手紙を書く用紙。便箋。

問１　傍線部Ａ「ほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた」とあるが、このときの道子の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　家族のための仕事をひたすらこなすよう強いられているにもかかわらず、兄にその辛い状況を理解してもらえず、孤独を感じている。

②　家族のための仕事を精一杯こなしていたつもりが、その仕事の使命感に酔っていると兄に指摘され、恥ずかしさにいたたまれなくなっている。

③　家族のための仕事に精一杯取り組んできたのに、その苦心が兄には真剣に受け止められていないことに気づき、張りつめた気持ちが緩んでいる。

④　家族のための仕事は正しいものであると信じてきたので、その重要性を理解しようとしない兄に対して、憤りを抑えがたくなっている。

⑤　家族のための仕事が自分には楽しいものとは思えないうえ、兄に冷やかされながらその仕事を続けなければならないので、投げやりな気分になっている。

問２　傍線部Ｂ「わくわくして肌を強くこすった」とあるが、この様子からうかがえる道子の内面の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　月光に照らされて厳かな雰囲気の中を「走る」うちに、身が引き締まるような思いを抱くとともに自分の行為の正しさを再認識し、その自信を得たことで胸の高鳴りを抑えきれずにいる。

②　月光に照らされた堤防を人目につかないように「走る」うちに、非常時では世間から非難されるかもしれないことに密(ひそ)かな喜びを感じ始め、その興奮を自分一人のものとしてかみしめようとしている。

③　月光に照らされて「走る」という行為によって、まるで女学校時代に戻ったような気持ちになり、窮屈に感じていた生活が変わるかもしれないという明るい予感を繰り返し味わっている。

④　月光の下を一人で「走る」という行為によって、社会や家族の一員としての役割意識から逃れた別の世界を見つけられたことに胸を躍らせ、その発見をあらためて実感しようとしている。

⑤　月光の下を一人で「走る」という行為によって、他者とかかわりを持てないことの寂しさを強く実感しつつも、社会や家庭の中で役割を持つ自分の存在を感覚的に確かめようとしている。

問３　この文章は、第一場面、第二場面、第三場面、第四場面の四つに分けられる。四つの場面の表現に関する説明として適当なものを、次のうちから二つ選べ。

①　第一場面では、母親の心情が「母親の声は鋭かった。」のように外部の視点から説明されているが、道子の心情は「よし………思い切り手足を動かしてやろう」のように、心内のつぶやきのみで説明されている。

②　第二場面では、母親の問いかけに対し、道子が倒置法の返答をしている。この不自然な返答とその直後の兄の誇張した言い回しが母親の不審を呼び、第三場面以降の話が急展開する。

③　第三場面後半の父親と母親の会話には「まあ」という言葉が三回出てくる。この三つの「まあ」はその直後の読点（とうてん）の有無に違いがあり、読点のあるものは驚きの気持ちを表し、読点のないものはあきれた気持ちを表している。

④　第一場面終わりと第四場面半ばの道子が堤防を走るシーンは、勢いよく走り出す様子を描くのに直喩（ちょくゆ）を用いたり、情景を描くのに色彩表現を用いたりして、イメージ豊かに表現されている。

⑤　兄との会話に見られるように、道子の台詞（せりふ）は、四つの場面を通じて、家族からの問いへの応答から始まっている。これは家族とかかわり合いを持つことについて、道子が消極的であることを表している。

⑥　第一場面から道子に焦点を当てて描かれていた話が、第三場面途中から夫婦に焦点を当てて描かれ始める。このことは、第四場面終わりで、両親を示す表現が「父親」「母親」から「夫」「妻」へ変化することではっきり示されている。

第二十二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　岡本かの子（一八八九〜一九三九）跡見女学校卒・小説家で、岡本太郎の母親。岡本太郎は、「芸術は爆発だ」という叫び（正確には、「芸術は無目的な爆発だ」）と大阪万博の巨大モニュメント『太陽の塔』で知られる芸術家。今回と同じ筆者による小説『鮨』は、センター試行試験で出題されていました。母親との関係を通して変化していく子供を描いた作品で、小説ではよく見られるタイプです。スタディサプリ「高1高2現代文」の第三講で扱っています。学年を問わず、そちらもぜひアタックしてみてください。なお、〈日常と非日常〉という対比の小説は、スタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第十講でもとりあげています。

語句

離れ＝はなれ→主に生活する母屋（おもや）ではなく、追加でつくられた補助的な部屋、別棟（べつむね）

新調＝しんちょう→誰かのおさがりでなく、おろしたて、新しくこしらえること

屈托する・屈託する＝くったくする→疲れて飽きること　cf屈託ない→悪気やこだわりがない。無邪気

戸外＝こがい→家の外

刻々＝こっこく・こくこく→しだいに、時を追って。刻一刻（こくいっこく）、時々刻々（じじこくこく）も同じ

総毛立つ＝そうけだつ→ぞっとして身の毛がよだつ。

端折る＝はしょる→着物の裾を折って、帯などにはさみこむこと。また、省略するという意味もある

撥刺・溌剌＝はつらつ→生き生きとして、元気がいい様子

揶揄＝からか(う)・やゆ→皮肉など言うこと。相手をひやかして面白がること

疾駆＝しっく↓速く走ること。疾走と同じ
足袋＝たび↓おもに和服のときの、布製のはきもの。足先が二つにわかれている。大工さんやとび職人も着用していることが多い
腰を折る＝こしをおる↓途中で邪魔をすること。「話の腰を折る」などと使う
口実＝こうじつ↓ごまかしや言い訳のための理由
頻りに＝しきりに↓しばしば・ひっきりなしに続けて
至極＝しごく↓この上なく・非常に
凛々しい＝りりしい↓きりりっと勇ましい態度や姿
もどかしい↓思い通りでなくじれったいこと。「はがゆい」もほぼ同義語
かがめる↓しゃがんだりして身を縮めること。「こごめる」ともいう
厳粛＝げんしゅく↓おごそかで心がひきしまること
不審＝ふしん↓疑わしい、いぶかしいこと。振る舞いが普通でないことを「挙動不審」という
　同音異義語「不信」↓信用できない、不誠実であること／不振↓成績などがふるわない、思わしくないこと
ほてる＝火照る↓顔や体が熱くなること
じりじりする↓思うようにならず、いらいらすること
悲観＝ひかん↓よくない予想をすること。ネガティブに考えて失望すること
頓狂＝とんきょう↓突然、その場に合わない、調子はずれの声をあげること
うずく↓ずきずき脈打つように痛むこと
顔をほころばす↓笑顔になる、にっこりほほえむ
近来＝きんらい↓このごろ、最近

復習問題　第二十二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）運動で心臓のコ動が高鳴る　①呼　②鼓　③来　④誇　⑤己

（イ）緊張でキュウ屈な思いをする　①給　②朽　③急　④糾　⑤窮

（ウ）急な外出のコウ実をさがす　①講　②公　③口　④考　⑤攻

（エ）街の不シン者に職務質問する　①信　②心　③振　④審　⑤請

（オ）ものごとをシン重に進める　①深　②慎　③伸　④津　⑤真

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）刻々に
①突然に　②あっという間に　③順番通りに
④ときどきに　⑤次第次第に

（キ）腰を折られて
①下手（したて）に出られて　②思わぬことに驚いて　③やる気を失って
④途中で妨げられて　⑤屈辱を感じて

（ク）われ知らず
①自分では意識しないで　②あれこれと迷うことなく　③人には気づかれないように
④本当の思いとは逆に　⑤他人の視線を意識して

第二十二講《小説その4》日常と非日常の対比

《本文の対比構造》

メイン＝非日常・違う世界
＝堤防を「快走」
主役＝道子

「ほんとうに溌剌と活きている感じ」
「疾駆する興奮した気持ち」
「活きている感じ」「駈足の快感」
「自分はいま撥剌と生きている」
「違った世界」
「自分独特の生き方を発見した興奮」
「わくわく」

主な対比

比較相手＝日常・もとの人間の世界

忙しい日常／
国策（生活への統制）／屈托
「縮こまった生活」への不満
「毎日窮屈な仕事に
圧えつけられて暮している」
もとの人間界

母親＝日常の代表
セリフ「どこへ行くんです、
この忙がしいのに」

対比

小さな比較相手

父親／兄弟
（親しいなりに距離をおいている）

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

日常の仕事に倦み疲れ、やや鬱屈して解放感を味わいたい主人公の話です。傍線前に「忙がしそうに縫い進み」「国策（脚注にあるように、国民の生活への縛り、統制が強まっている）」「この頃は一日中大変」などの表現があります。さらにその後、「あわただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりして来たという感じが道子を不満にした」「毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮している」とまであります。さらにその後、堤防を「快走」（タイトルですぞ！）することで非日常的な、別世界のような興奮を味わうことになります。③の「張りつめた気持ちが緩んで」は、いわば〝緊張と弛緩〟で正しい対比です。傍線直後にも「肩が凝って、坐り続けた両腿がだるく張った」「立上って」「戸外へ出てみた」とあり、この〝緊張と弛緩〟を繰り返しておりヒントになっています。したがって、③が正解です。①は「孤独」が×です。〝孤独⟷他者とのつながり回復〟というような対比はありません。堤防を走って、誰かとお友達になって救われるという話ではありません。堤防に誰もいないことを確認して走り出していますし、さらに「快走」の快感も「独りで内密に味わいたかった」と書いてあります。このように〝対比〟という尺度、軸線をもちだすと、選択肢中のヘンな表現がどうしてヘンなのか（間違いなのか）よくわかります。というわけで、この選択肢は正しい対比喪失の誤りです。②はまず、「仕事の使命感」が×です。「忙がしい」というだけです。道子はこれに「不満」ともあります。また、同様ですが、「使命感に酔っている」とのお兄さんの「指摘」が当たっていて「恥ずかし」い思いをしているわけでもありません。それなら「吐息」をつくのではなく、赤面するべきでしたね。ともあれ、ことごとく記述に反する誤りです。④は、「仕事は正しいものであると信じて」「その重要性」が×です。日常の鬱屈からの解放が、この文章の主題ですからね。正しい対比喪失の誤りです。〝正誤〟〝重要・非重要〟の対比ではございません。さらに「兄に対して、憤りを抑えがたく」も×です。記述に反する誤りです。日常的な仕事の正しさや重要さに無理解なお兄さんをこらしめたり、正しい道へ導いてあげようというストーリーではないですから。このあとのストーリーでもお兄さんとの争いはありません。⑤は「投げやりな気分」が×です。自暴自棄、捨て鉢になっているわけではありません。着物を「畳の上に置いた」だけで破り裂いたりもしてません。記述に反する誤りです。間違いの選択肢は、このように、ありもしない物語をこしらえるものです。この問題出題者の方は、とても想像力のある方なのですね。よくもこんなにもたくさんの間違い選択肢をつくれるものです。みなさんもその苦労と

創意に気付いてあげましょう、そして×をつけましょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

さあ、日常から非日常への解放ですよ。「ほんとうに潑剌と活きている感じ」「活きている感じ」「疾駆する興奮した気持ちを自分独りで内密に味わい」「自分独特の生き方を発見した興奮」とありますね。したがって、④が正解です。①は「自分の行為の正しさ」が×です。先ほどの問１の④を引きずってます。記述に反する誤りといってもよいですし、〝不正⟷正義〟の対比ではないという点では、正しい対比喪失の誤りです。②は「非常時では世間から非難される」ことに「興奮」が×です。変質者か！　犯罪者か！　〝非日常の興奮〟なら正解なのにね。記述に反する誤りです。また「世間」との対比は本文にはありません。道徳の問題ではないのです。はい、正しい対比喪失の誤りです。③は「窮屈に感じていた生活」はＯＫですが、その「生活が変わる」が×です。〝日常と非日常〟は対置されているのであって、日常そのものが変わってしまう話ではありません。「違った世界」「もとの人間界」という表現がありますでしょ。日常世界と違うところで疾駆してこその「快走」なのです。⑤は「他者とかかわりを持てないことの寂しさ」が×です。これも問１の①を引きずった間違いです。正しい対比喪失の誤りです。さらに「社会や家庭～役割～確かめよう」は、絵に描いたような典型的な対比混乱の誤りです。

問３《表現理解・選択肢》

①は「道子の心情」について「心内のつぶやきのみで説明」が不当な限定判断です。《本文の対比構造》でも多数挙げているように、道子の心情については「つぶやき」以外に、筆者による描写としてどっさり出てきます。②は「倒置法の返答」を「不自然」としていることが×です。倒置法は、主語と述語の順番や修飾語と被修飾語の順番をひっくり返す表現技法ですが、〝強調〟であって、「不自然」ではありません。なお、「直後の兄の誇張した言い回し」とありますが、むしろ倒置法こそ「誇張」です。この点でもすれ違い、間違いですね。記述に反する誤りと言っていいでしょう。さらにさらに、そもそもこの文章の対比構造にしても〝不自然な兄妹⟷自然重視の母親〟ではありません。この点で、正しい対比喪失の誤りです。③は「まあ」について、「読点のないものはあきれた気持ちを表している」が×です。「まあ待ちなさい」という表現がありますが、これは相手を落ち着か

せよう、なだめようという〝まあまあ、そんなあわてずに〟という意味ですよ。〝おう、なんてこった！〟という「あきれ」ではありませんからね。はい、記述に反する誤りです。④はOKですね。「直喩」というのは、〝まるで○○のように〟というカタチで、比喩ですよ、たとえですよ、ということがダイレクトに、直接的にわかる表現技法です（英語ではアナロジー）。文中に「弾条仕掛のように飛び出した」「弾丸のように～疾走」とあります。文句ありません。ちなみに「まるで」とか「のように」が付いていない比喩のことを「暗喩（あんゆ）」「隠喩（いんゆ）」（英語ではメタファー）といいます。ちょく、ではなくそれとなく暗示的に隠しながらたとえをする技法です。さて、加えて、「西の空を薄桃色に燃え立たせ」「影絵のように黝（くろ）ずんで」「桃色の西の端れに、藍色の山脈の峰」「青白い月光」「青白い月の光」などの表現がありますから、「情景を描くのに色彩表現を用いたり」も、OKということになります。⑤は「道子が消極的」が×です。家族とのかかわりをめぐって〝積極派⟷消極派〟などいっさい比べていませんからね。正しい対比喪失の誤りです。⑥は、とくに問題ありません。つまり、記述に合致していて、あっけない正解です。「場面」が変わるだけのことはありますね。

模範解答

問１＝③　問２＝④　問３＝④・⑥

復習問題　解答　第二十二講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）④　（オ）②
（カ）⑤　（キ）④　（ク）①

解答漢字一覧

（ア）鼓動　（イ）窮屈　（ウ）口実　（エ）不審　（オ）慎重